

今日の説教のポイント<マタイによる福音書6章5-15節>

①人間が宗教的存在であることを示す祈り。大事なことは、ただ自分の願いを叫ぶだけではなく、祈る相手、神の願いも聞こうとすること。

車のお祓いをする神社に若者たちが行って、五千円を払って手を合わせて祈っている光景を見ました。五千円で事故に合わないなら安いものだというのでしょうか。私は元旦の初詣やこういう場面を見るといつも不思議に思うのです。相手（神様）が願っていることは聞かずに、ただ自分の願いを祈って聞かれる神様がいてどうして思えるのだろうか、と。このような人間の持つ心情 [人間の宗教性：バルト] に応えようとするだけの宗教は問題だと、ドストエフスキーは指摘しています。本当の祈りは、祈る相手（神）が真に存在することを信じ、よって相手の言うことを聞こうとすることが伴わずにはおれないはずで、では、耳を傾けたときに、何が聞こえて来るのでしょうか？

②願うものを与えてもらうために祈るのではない。神様は私に必要なものを必ず与えて下さるのだ、と心に刻み込むために祈るのである。

イエス様は今日の箇所の前半で、まねてはならない祈りの姿をいろいろ挙げておられます。しかし、これを読んで、祈る姿・祈り方など、外側の問題に気を取られてはなりません。「私たちがどういう姿で、どういう風に祈ったら、願いをかなえてもらえるか」が、ここで考えるテーマではないからです。では、何のために祈るのでしょうか？

主イエスは、「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」(8)とされています。「必要なもの」であって、「欲しいもの」ではない点が大事です。神様はすでに私たちに「必要なもの」を与えて下さっているのです！これを思いながら生きられることは幸いです。「失った、手に入らない」と考えそうな時に、「必要なものは与えられているのだ」と考えることができますからです。イエス様もしばしば一人で寂しい場所で祈られました。その後、また力を回復されて歩んで行かれたイエス様の姿を聖書は記しています。

17世紀の神学者コッツェイウスが語った言葉を覚えておきたいと思えます。「祈りは、願いが聞かれるためにするものではなく、必要なものは全て与えられていることを覚え直すためにするものである」。